

切り花の取扱

(つりき)

こむかひ

(九) 夏菊水揚げ法

中傳

早朝に切り、根をたき割り、上酒にて養る、又酒に浸して、炭火にて焼くもよし、冷水に入置き、水揚げて後生るべし。

(十) 千日紅水揚げ法

中傳

朝早く切り、根をたき、熱灰にて焼くなり、根を紙にて包み、冷水に入置き、水揚げたる後生るなり。

(十一) 桔梗水揚げ法

初傳

矢張早天に切り、根をあつき灰にて、能々焼くなり、朽ちたる所を、切り捨て、冷水に深く入れ置き、水揚げて後生るなり。

(十二) 水葵水揚げ法

中傳

極早天に切り、竹のへらにて、葉本迄つき通し

其中へ、ふとき紙よりを、さし込み、深く冷水に入置き、水揚げて後生るべし、或は穴の中へ、青山椒三四粒押込みて、生るも妙なり。

(十三) 魚柳水揚げ法

中傳

早天に切り、水一升到、鹽五勺入れ、能く煮て桶に入れ、其中へ、湯のさむる迄、根を浸し置き、水揚げて後花器にうつすべし。

(十四) ぼたん、芍薬水揚げ法

初傳

極早天に切り、根本をたき、油をつけて、火にてよくよく焼き、朽ちたる所を、切り捨て、冷水に入れ置き、水揚げて後生るべし。

(十五) 孔雀草水揚げ法

初傳

極早天に伐るなり小桶に株を差し入れ、其中へ熱湯を、注ぎ入れ、湯の冷むる迄、捨置き、朽ち

たる所を、切り捨て、冷水へ深く入置き、水揚りて後、瓶に挿すべし。

(十六) 雨後の杜若の傳 中傳

早天に切り取り、直に硫黃の華を、粉にして、株にすりこみ、根を紙にて包み、冷水に入置き水揚りて後之を挿す時、白砂糖を、水に溶し、其水にて杜若の葉を磨く時は、雨後の如く、見ゆべし。

(十七) 花薑蒲水揚法 初傳

朝伐り取り、白水に鹽を加へたるものに、二十分許浸し、又取出して、清水に鶏卵二三個、碎き入れ、よくかきませ、三寸程を、二十分間程浸した後生くべし。

(十八) 照もみち水揚法 中傳

早天に切り、水一升に、鹽の、かり一合加へ、花瓶に入れて、其中に、挿すべし。

(十九) 水引草水揚法 中傳

極早天に切り、根をたき、油をつけ、熱灰の

中へ、二十分間程、差込み、焼朽ちたる所を、切り捨て、根を一寸程、十文字に割り、冷水に、挿すべし。

(二十) 萩水揚法 中傳

極早天露ある内に、伐るべし、一升徳利に、水と、硫黃二十匁入れ、口より株を、挿込み、能々養、朽ちたる所を、切捨て、冷水に挿すべし、花器には、上茶を煎じたる汁を入れるべし。

(廿一) 秋海棠水揚法 奥傳

極早天に伐り、根を割りて、山椒の實をはさみ炭火にて、焼き、冷水に挿すべし、但節高き故に水揚げ兼ねるなり、依て節を、互ひ違ひに、割るなり、即一の節を右よりせば、次の節を左より割るが如きを云ふ。

(廿二) だんどく水揚法 中傳

早朝又は、夕方に伐るを、よしとす、川芎を、煎じたる、極熱き汁へ、根を浸し、養え朽ちたる

所を、切り捨て、生るべし、但水深き、花器を好むなり。

是でお約束だけの、お話を、終りました、そこでまた／＼御紹介致したい、物が御座いますが、夫は、奥傳としては、河骨水揚法、同亮生の傳とか結び南天の傳とか、時雨柳又は露落し柳の傳、或は、蓮水揚法、或は竹売生の傳、割れ竹水揚法

緑の家

腸の病

色鉛筆の主人公であつた坊やは、讀者諸君の御存じの如く、否、讀者諸君よりも執筆者の若き父と校閲者の若き母とが、最も良く知つて居る通り其當時は一年と九ヶ月であつた。其後坊やのお家は二度變つた。

など申す種類で、幼稚園、或は幼児本位の目的には不必要と存じますし、旁々貴重な誌上を、下らぬ長話で、埋める事も甚だ心苦しく存じますので此度は之にて、筆を止める事と致します、後日誌上にお明きが、御座いましたらば、今數種花物を御紹介致したいと存じます。

若父

坊やの一家は先づ八月の二十八日に郊外の代々木に引越した。其理由は次の通りである。坊やは四月（一年と五ヶ月の時）に牛乳をコンデンスに代へた時から腸を悪くして、次第／＼に痩せて、且つ非常に氣むつかしく成つて、いろ／＼氣を附けても手を盡しても、中々急に癒らなかつた爲め